第３回　魅力ある府立高校づくり懇話会　（概要）

１　日　　時

令和４年 12 月 27 日（火）午前 10 時～正午

２　場　　所

京都産業大学むすびわざ館　３－Ａ（３階）

３　出 席 者

○委　　員　11 名（欠席１名）

○教育委員会　前川教育長、木上教育次長、村山教育監、吉村指導部長、村田指導部理事、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、片又高校改革推進室参事　他

４　概　　要

○意見聴取

○事務局からの説明

○意見交換

■意見聴取

◆：座長　　○：委員　　□：教育委員会

◆今回の議論に入る前に、前回での議論に関わり、２点について改めて意見や説明をうかがいたい。１点目は、高等学校の機能等について意見いただいた委員からの、より詳しい説明を。２点目は、高校生アンケート結果における高校選択の理由についての、府教委のさらなる分析結果を。それぞれお話しいただきたい。

○高等学校の機能と運営の再編について考えをお示ししたい。今も既にそうだが、ＧＩＧＡスクールの先の状況としては、学びの場が多層的になっているということが前提である。高校教育を担う場としては、「当該の学校」、「近隣の学校」、「地域」、「オンライン学習・生活空間」が挙げられる。「オンラインの学習生活・空間」がベースとして１層あって、その上に対面のリアルな「当該の学校」、「近隣の学校」、「地域」という層が乗った、階層的な構造であると考える。

○学校が担ってきた機能は、大きく、「学習活動」、部活動も含めた「社会的活動」、そして「居場所機能」の３つである。これまでは、学校が全て担っている部分や、地域の子ども会や家庭と分担していた部分があったが、学校外の教育機能の状況や、塾・習い事など、生徒たちの学習生活環境が変化してきており、どの機能をどこで担うのかを再整理する必要がある。

○「学習活動」は、「個別的な教科学習」、「協働的な教科学習」、「総合的な学習」の３つに分けてとらえることができる。個別的な教科学習においては、生徒が各自で進めていける要素が大きいと考える。当該学校だけでなく、通信制高校などの近隣の学校、地域のリソース、オンラ

インなど、幅広い場を活用して進めていける。
高校においては、履修主義と修得主義の考え方がある。履修主義では、在学時間や学修時間が重視され、授業に一定の時間数出席することにより、単位が認定される。それに対して修得主義では、学ぶ場所、学んだ時間に関わらず、試験等に合格すればよいというもので、自分で学習して単位認定を受けられる。コロナ禍を経て、履修主義から修得主義へと、実社会ではメンバーシップ型からジョブ型へと、大きく進んでいる。そのような流れの中で、高校においては単位制的な考え方に近い形になっていくと考える。
一方、現実世界と繋げて理解する、使える・創るといった要素においては、生徒同士が対面で協働的に学習する方が効果的である。授業ではこちらの方がポイントであり、生徒が在籍する学校が中心的に担う部分である。
また、総合的な学習は探究活動であり、生徒自身が課題を設定して、学び続けていくものである。在籍校での活動が軸になるが、近隣の学校とコンソーシアム的に取り組む場合もあるし、地域社会に出て行く、オンラインで繋がるということもある。

○「社会的活動」については、まず特別活動がある。交わる、協働する、自治するという要素において、在籍校での学校生活が中心となるが、近隣の学校との連携や、オンラインの活用も一定考えられる。部活動については、外部機関への移行など、当該学校だけでなく、近隣の学校や地域との共同運営の形に進んでいくだろう。

○また学校には、コロナ禍の中で再認識された「居場所機能」というものもある。共に生活する場において、互いに承認・ケアし合うという要素である。学校・クラスという基礎集団が中心ではあるが、近年ではオンライン上の居場所というものも提供されている。例えば不登校の生徒にとっては、居場所が１つしかない、所属する集団が単一であるということは、厳しいことでもある。日本では、複数の居場所に所属するという考え方があまり浸透していない現状がある。学校内外において、居場所を複数化していくことが必要である。

○これらの視点や要素を踏まえて、フレキシブルな高校づくりを検討してはどうか。教科学習については、個別最適な単位制的運用、小さな修得主義を部分的に活用する。総合的な学習においては、コンソーシアム化するなどして、学校外の様々な資源にも幅広く繋がっていく。様々な場所を回ってプロジェクトを進める「「旅」する高校生」であってほしいと思う。また部活動は、共同運営を目指していく。

○在籍校が重点的に担う機能は、「知育の協働化」と「徳育の個性化」である。協働する中で学びを深めていったり、自分たちでルールを考え自治する経験を積んでいったり、基礎集団の中で安心して学べたりといった部分になるだろう。大きな修得主義と緩やかな共生空間、そこに向けたカリキュラムなどの中身といった視点で、学校の在り方を検討していくとよいのではないか。

◆それぞれの高校が全ての機能を持つことはできない。高校によっていずれかの機能へ特化させることや、機能を組み合わせて特色化を図ることも考えられる。今後の議論にも生かしていた

だきたいと思う。

□第１回会議の資料として、府立高校生のアンケートの結果を提示した。その中の「在籍する高校を選択した理由」に関して、分析の結果など、説明をさせていただく。
在籍する高校を選択した理由については、複数選択を可とし、選択肢を細かく設定していた。そのため、回答が細分化しているが、「自宅から近い・通いやすい」以外の選択肢のうち、「学校の雰囲気の良さ」、「部活と勉強の両立」、「特色ある授業や取組」などの学校の特色に関わる要素も回答の多くを占めている。また、「自宅から近い・通いやすい」を選択した生徒を取り出してみると、当該理由のみを選択した生徒は約５％であった。多くの生徒が複数の理由を選択しており、学校の特色に関わる要素や保護者の意見、中学校での進路指導、先輩の活躍など、様々な要素や理由から学校選択しているということがうかがえる。
したがって、通学の利便性については、学校選択における大きな要素ではあるものの、複合的な要素の一部に過ぎず、府立高校全体において、学校の魅力・特色づくりを進めることが非常に重要である。また、その魅力や特色を、中学生・保護者等に対して積極的に発信していくことが必要であると認識している。

◆地理的条件だけを前提とするような議論になってしまってはいけない。やはり、まず学校が特色を持っていて、様々なニーズに対して環境を整えている。その中から学校を選ぶときの複数の要素において、自宅から近いといことも１つであるという解釈がよいと考える。

■事務局からの説明

■意見交換（主な意見）

◆全日制課程における各学科の役割、望ましい配置について、御意見をいただきたい。

○京都府は、普通科と普通科系専門学科に通う高校生が非常に多い。高等学校に在籍する多くの生徒の基本的な思いは、高等学校段階で学ぶべき教養を身につけたいということである。進路との関連性が特化されてもいるが、それは一面的な部分である。高校卒業資格を得る、高校卒業段階の一定の教養を身につけるということが、高校生、保護者にとっての大きなニーズであると考えている。

○普通科等において、あまりにも特色、魅力の部分が乏しいがために、どの学校に行っても一緒だとなってしまっているのであれば、改善が必要である。オンラインの活用や学校間の連携などにより、各校での様々な特色づくり、魅力化を進めることが、今後必要になってくる。学校の特色に魅力を感じて入学した生徒でも、通学時間が長時間であると、もしも学校との相性が悪くなれば、学校との距離を非常に遠く感じてしまうこともある。そういうことに対しては、様々な連携やオンラインの活用などが考えられる。

○京都府は南北に長い地形なので、地域によって実情が大きく違う。一定の地域内に複数の学校

がある場合には、魅力化や特色化をどんどん進めることで、選択肢が増えることになる。一方で、北部ではそうはいかない実情にもあるので、１つの学校が複数の役割を担って、様々なニーズに応えていくということになるのではないか。

○夜間定時制は、学びに向かう意欲が最初から満ちている生徒ばかりではない。そうした生徒に対しては、対面で寄り添ってきっかけをつくっていくことが非常に大事である。通信制高校の生徒が増加している。入り口は非常に魅力的だが、出口の状況はどうなっているのだろうか。通信制で、自分で学びの計画を立てることは、相当に自主性や主体性が求められる。そうした部分のきっかけについて、丁寧に寄り添いながら対応していく普通科なども求められているのではないか。

○桃山高校は、１学年９クラスのうち２クラスが自然科学科という普通科系専門学科であり、前期選抜で100％募集を行っている。桃山高校の自然科学科に入学して、グローバルサイエンス部の生物班で３年間研究したいといった、理科好きの生徒たちが集まってくる。桃山高校であればやはり自然科学科に行きたい、理科好きの仲間たちと一緒に学びたいという思いで選んでいる。それが１つの魅力になって、入学者選抜では専門学科の方が倍率が高くなっている。普通科は中期選抜もあり、前期選抜で自然科学科を志願して不調だった生徒が、中期選抜で普通科を志願するというケースもある。

○北部は、交通の便が京都市内のように良くないので、１つの学校の中で多様な生徒に対応した教育が必要である。北部においても、普通科系専門学科の選択肢はある。以前は、とりあえず普通科に行き、大学を目指すという流れがあったが、最近は目的意識を持って入学している生徒が増えている。中学生は自分が何を目指しているのかという意識をかなり明確に持つようになっている。

○普通科の中に、スポーツ総合専攻というスポーツを専門とするコースを設置する高校がある。これは、普通科でありながら、選抜の段階から分かれている。北部では１校にのみ設置されているが、近年は他府県も含めた私学との関係において、募集が非常に厳しい状況がある。

○普通科では、コース制を設けている学校が多い。学校によってコースの名前が様々である。そのあたりが、中学生にとっては分かりづらいのかもしれない。いろいろな名前のコースが混在しており、さらに普通科系専門学科もある。高校側として、どのような教育内容かということを明確に見せていかないと、中学生には選ばれない。イメージ戦略が非常に重要だと感じている。

○南部地域では、中学生が公立と私立と合わせて100校程度の中から高校を選択できるという状況がある。そのような地域では、実際にそれぞれの学校の特色を中学生たちがなかなか把握しにくいというのが悩みである。中学校の進路指導担当教員でも明確に把握できないくらいの学校数がある。普通科のコースと、そのネーミングが様々すぎるので、それを理解するのにも時間がかかる。スクールガイドで分かりやすく示している学校もあれば、大まかに示している学

校もあり、様々である。また、それぞれのコースにおいて、卒業後の進路まで発信している学校もあれば、どのような生徒像を求めるかなどで止めているところもある。中学生たちが情報を選択していくには、非常に難しい現状がある。

○目的意識が明確な中学生は、専門学科を選択していることが多く、自分の将来に向けての学びをイメージしている。逆に、自分にどんな適性があって、これから何を学んだらいいのか悩んでいる中学生の方が、実は大多数である。そういった中学生が、いろいろな可能性のある普通科で学びたいときに、その普通科の中に特色がいろいろとありすぎることは、どうなのだろうかと疑問に思う。今の時代に応じた国際的な感覚、英語教育を軸にした普通科など、少し大きな軸でカテゴリー分けできるぐらいの方が、中学生にとっては選択しやすいのではないかという印象を持っている。

○数十年前から、中学生の高校や将来に対するビジョン、将来展望などはそれほど大きく変わっていないと思う。中学３年生が高校を選択するときに、こんなことをやりたいからこの学校を選ぶという子も当然いるが、それ以外の子が大多数である。とりあえず普通科を選ぶというような子どもたちが非常に多い。高校の普通科に入学した段階で、自分のこと、将来の進学や就職などをどうしていこうかと考える上で、高校１年生のカリキュラムや内容は非常に大事である。２年生の段階からは、文系や理系など様々に分かれていくと思うので、普通科のコース制では、高校１年生の段階が非常に大事だと考える。中学生の段階で自分がどうしたいかということはなかなか決められないまま、高校に行っている子どもが多い。

○中学生の高校選択の決め手としては、部活動という理由が今でも強いと思う。これから、部活動は地域移行という流れであるが、中学校では部活動が占めている要素は非常に大きい。そういった理由で高校を選んだ場合、入学後どうしていくかというのは大きな課題であり、中学校段階での進路指導も重要である。

○スクールガイドでは、高校１年生での学習内容を、どのように２年生、３年生に繋げていくかということや、出口の部分を明確に発信してもらえると、中学生も選択しやすいと思う。

○自分の子どもたちも、高校入試の時点でやりたいことが特に明確ではなかったことで、普通科という選択になったと思う。数学が得意で、理系を選択した子どもが、大学進学にあたっては文系に転向をするようなこともある。高校在学中にもそういった変更が起こるので、高校入学時点で細分化されすぎると、選ぶことも難しいと思う。

○普通科にはいろいろな学校があると思うが、保護者から見ると、子どもたちは、高校を選ぶ段階では細かい内容は分かっていない。学校の雰囲気が楽しそうか、部活動はどうか、施設が綺麗かなど、本当に些細なことである。普通科について学習面で魅力化を考えると、英語に特化するとか、ＩＣＴなどが考えられるのではないか。私学では、株式や経済に関する授業もあると聞いたことがある。高校に入学してから、３年間で精神的にも大きく成長すると思う。京都

府内には大学が多く、企業もたくさんある。この学校ではこの企業と連携した学びができるなど、実際の社会に出ていくための学習を、高校においては進めてほしい。

○普通科では実技系教科の授業時間が少ないこと、絵を描くのが好きだったことを理由として、美術系の高校に進学した。中学３年生の夏までは部活動に打ち込んでいて、11 月に学校見学に行き、雰囲気が良くて、そこから入試に備えたような状況であった。専門学科に進むということは、中学生にとっては、大きな選択になるかもしれない。そういうことをじっくり考える時間が、中学生にはあまり無いように思う。中学３年生の部活動を終えてから秋頃までの非常に短い期間において、進路を決めていくような状況である。

○中学校の三者面談では、打ち込んでいる部活動に対する励ましが主となることもある。学習塾からは、大学進学等の多い高校をすすめられる。保護者も子どもも全く知識がなければ、学習塾から言われたことを鵜呑みにしてしまう。また、特色で見るなら私立の方がよいと、私立高校をすすめられる現状もあるようである。高校生対象アンケートの高校を選択した理由でも、「塾の先生からのすすめ」や「保護者のすすめ」は数パーセントに過ぎない。やはり生徒本人が学校見学をして、雰囲気の良さを感じたり、自分の可能性へ挑戦したりしていくことが大切である。

○北部では、おのおのの高校に特色を出していけるほど学校数が多くないので、１校の普通科の中に複数の特色を持たせ、複数の役割を担っていくことが重要だと考えている。高校３年間において自身の進路を明確にして大学進学等へ向かう生徒、入学当初から明確な目的意識を持っている生徒など、様々である。そうした生徒たち皆が、普通科の中で学んでいくためには、普通科の中に複数の役割を担わせることが重要である。

○北部では、在り方ビジョンでも触れられているように、地域創生の核としての社会的役割を高校が果たすことも大変重要である。例えば京丹後市では、小・中学校を中心にグローバルな人材の育成に取り組んでいる。この取組は、府教育委員会の次世代型の外国語教育の指定を受けて高校とも繋がっており、小・中・高で英語教育の充実を図っている。また、市では、中学生と高校生の希望者を集めて、大学の研究者と連携したワークショップを開くなど、英語を中心とした課題解決型の学習をデザイン思考のもとで進めている。
市教育委員会として関われるのは小学校・中学校段階までであり、その先の教育を充実させていくという意味での高校の役割は、大変重要だと考えている。地域における教育の核としての役割を高校が果たしていく中で、普通科の特色が生まれることもあるのではないか。例えば、高校の普通科の１つのクラスの中で、地域の小・中学校での学びを深めるようなことも考えられる。そういったことは、地元の教育委員会と府の教育委員会とが連携しながらつくっていくことが必要である。地域創生という視点とあわせて考えながら、その中で普通科の特色が生まれていけばよいと考える。

◆北部地域の中学生は、現状において、選択幅が非常に狭い。選択できる学校が多くあるわけではなく、１つの学校の中に、様々なコースや選択幅が必要になってくる。南部地域と違うとこ

ろはそこなのだろう。一方で、南部地域で求められているのは、それぞれの学校での特色化ではないか。北部地域では、１つの学校の中に選択肢を存在さっせていく。小学校・中学校の教育と高等学校の学科やコースなどを連携させるという考え方も、地域によってはあってもよいのかもしれない。

○北部では選択肢が少ないので、１校の中に様々なコースなどが必要である。その中で、途中で変更もできるような柔軟性をどこまで持たせられるかということが大事だと考えている。加えて、なかなか学習意欲が高くない生徒にどう寄り添うか。どの学校でも教員は手厚く指導されていると思うが、どうしても苦戦する場合がある。そのようなときに、生徒たちからどういうメッセージを受け取るか。結果的に進路変更はありうるにしても、きっちりとメッセージを受け取って、高校の中に必要な機能をつくっていくことが大事である。

○１つの高校の中にいろいろな機能が必要であると同時に、中学生の間に様々な力を身につけさせることが求められる。自立の力が必要であり、中学校と高校とが上手く連携しながら、子どもたちに力をつけさせていかないといけない。

○ＳＴＥAM教育については、特に「A」のところが大事だと考えている。「創造力」をどのように充実させるかという要素は非常に大きい。そうした視点でのＳＴＥAM教育を進めていくことも、検討が必要であると考える。

○オンライン空間や、近隣の学校との協働、地域など、学びの場は広げられるが、在籍する当該学校が、子どもの「学び」と「成長」を手放さないということが重要である。個別最適な学びにおいても、学校が学びに寄り添っていかないといけない。共に生活し、伴走する教員の役割は非常に大きい。

○高校の特色化について、その「特色」というものをどう捉えるのか。特色をいろいろなコースなどで考えようとするが、結局のところ、進学実績などで見られ、横方向に水平のはずの個性が全部輪切りにされてしまう状況がある。実は日本は、他の国と比べると高校入試の段階で断片的にスライスされおり、細分化している傾向である。だから似たような中で細かな選択肢がたくさんあって困るといったことが起こる。

○高校教育改革の基本的な論点として、専門教育と一般教育との関係ということがある。専門教育というのは、その先の例えば大学や職業といったものにどう繋がるのかというものである。一般教育は、教養や人間的な成長などを含めて、どの高校でも共通のコアとしてきちんと保障していくべきものである。だから、北部・南部といった地域に関係なく、高校としての核心部分は共通であって、揺らいではいけない。それ以外の専門分化していく部分において、必修と選択との関係もあるが、どのようにカリキュラム編成やコース分けを考えるのか、様々な外部機関等にどう繋いでいくかということが問われてくる。

○特色化について、横方向の水平に個性を出したつもりが、縦軸としてしか見られていないかもしれない状況がある。それに対しては、総合的な学習の時間や課題研究などのビジョン、コンセプトが鍵になる。そのような特色の「顔」をつくっていくことと、校風が連動してくると思う。中学生が選択するときに「学校の雰囲気」などと言うわけだが、それは進学実績だけではなく、学校の校風として表れているものである。その校風にしっかりと繋がるようなカリキュラムの核を持っているのかどうかが大事になってくるのではないか。大学や地域等と連携していく中で、どのようにその中身をつくっていくのかが問われてくる。

○コース分けについては、結局は出口である進路と繋がってくるだろう。そこをどう考えていくのか。それは単に大学の偏差値帯や、大学進学か就職かといったレベルではなくて、中身に即した、こういう学びをしているからこういう学部などで学んでいきたいという部分が、もう少しはっきりと見えてくるようでないといけない。日本では、「進路指導」が進学指導に矮小化されているような傾向があるので、本当の意味での進路指導、キャリア教育を、充実させていく視点がないと、真の特色化には繋がってこないのではないか。

○もう少し、子どもの育ちの連続性や豊かな人生といった軸で、議論していく必要があるのではないか。高校教育だけを切り出して議論しても、なかなかうまくいかないのではないかと感じる。社会構造が大きく変化している中、大学生の様子を見ていると、専門学科出身の学生たちの方が実は伸びている。吸収力の高さや、いろいろな現場感のようなものを大事にできる感性を持っていて、それで伸びている状況をとらえると、高等教育全体のデザインが大事であると考える。進学校から大学に入学したことでゴールテープを切ったような学生たちも、一定数いる。そこが目的になってしまって、キャリアを継承できていない学生たちも、現実的にいる。今の時代では、転職や、会社を辞めることを、必ずしもネガティブにはとらえていない。そこからステップアップしていったり、自分の本当にやりたいことを見つけて起業したりというような、ポジティブな転職や離職をやっている社会人も多いと思う。一方で、大学入学時からゴールテープを切った形で過ごして、就職戦線の大きな流れの中で、大学２年生ぐらいからインターンシップなどをやり始め、深く考えることもなく就職してしまい、後からこんなはずじゃなかったと考えている若者たちも、今は結構多いのではないか。

○社会が変わっている中で、高校を軸に、中学校・大学が連携しながら、どのように対応していくか。現在の大学受験と 18 歳人口の状況とを見ると、推薦入試などによって、年内には半数ぐらいの希望者が大学進学を決めてしまっている。今までどおり、大学入試によって学生たちを選抜できる環境が、失われつつある。大学側からすると、選抜機能を持てないことは危機であるが、その危機をある意味で反転させていきながら、地域の高校との本質的な高大連携が考えていくとよいのではないか。子どもたちの人生や、地域社会を背景にした高大接続の可能性を感じている。京都は大学が多いので、その資源を取り込みながら府立高校の魅力を増していくという方策は、他のどの地域、都道府県よりもとりやすいはずである。京都が持っている社会資源を本質的に高等教育に取り込んでいくことを、もっと考えていくべきである。

○いかに教員を応援する仕組みをつくるかが大事である。社会状況が変わっており、専門的な内容にも特化していかなければいけない。例えば、商業という言葉も、その在り方も、すでに激変している。ｅコマースなども含めた物の売り方や、ＳＮＳといったものと接続させたマーケティングがかなり重要視されてきているが、そういったものが高校教育の中には入りづらい状況がある。それを教員の力量だと言ってしまうのではなく、教員を支える仕組みづくりを同時に考えていかないと、厳しいと思う。高校の教員たちが生徒をしっかり指導していくには、教員にどんどん新しい武器を提供したり、一緒につくり出したりしていくことが大切である。これだけ社会の流れが速いと、学校現場だけに頼る構造では持たないと考える。

○北部では選択できる高校が少ないので、１つの高校に多様性をもたせる必要があるということは、実はチャンスなのではないか。コース変更をしたいときや途中でやりたいことが変わったときに、１つの学校の中に多様性があれば、対応できる可能性がある。オンラインも含めて１つの学校の中で様々な対応ができるようになれば、選択できる学校が少ないというネガティブな状況も、新しいモデルをつくったり、チャンスや可能性が広がったりということにつながっていく。課題を足がかりに、新しいことが実現できるような流れがよい。

○大きなポイントとして、普通科であるからこそ、大学進学を第一の目的とするのではなく、変化の激しい現代社会において「主体的に生きるための総合力」を身につけるための場となることを願う。そのために必要になる学びとしては、生徒が自らの将来像を描き、それを修正し、実現へ向けた行動が起こせるようになること。また、多様な他者と協調して生きるための素養に基づいたコミュニケーション力を身につけること。さらに、幅広い領域に関心を持ち、自発的に研究する姿勢とスキルを身につけることが大切であると思う。

○これまでの普通科高校は、大学進学へ向けた準備をするための予備校であるか、または中学校卒業から社会的自立が可能になるまでの単なる猶予期間であることが多かったと言えるのではないか。これからの新しい普通科高校は、大学ではできない自由な学びの体験ができる期間であるべきと考える。自由であると同時に実用的でもある学びを通じて、各自の将来へ向けて踏み出す方向性を見定めることができる、つまり普通科高校は生徒が自分の人生に関わる初めての選択をするための３年間であるという考え方が大切である。「自分の夢や目標を本気で見つけたい人を本気で応援します」といったアピールが可能な高校が、普通科高校である。

◆普通科の特色化を考えているが、中学生段階ではなかなか将来を決めにくいという実態があるようだ。多様なコース・メニューとして、種類を提供しすぎることは、中学生や保護者をより悩ませることになるかもしれない。進学指導、国際教育、ＩＣＴ、キャリア教育などによって学校を魅力化するという意見をいただいた。北部地域では、１つの学校の中に多様性を持たせることや、柔軟に行き来や転換ができるようにすることも、魅力化の１つの道である。

◆地域人材をどう育てるかという観点では、その地域の小・中学校とうまく連携しながら高等学校のカリキュラムをつくっていくことも考えられる。場合によっては、１クラス 40 人の縛りにとらわれず、その半分程度の規模でもよいので、地域人材、担い手育成に繋がるようなコー

スなどもあってよいのではないか。

○保護者の願いとしては、まずは高卒資格を得てほしいということがある。それに加えて、高校生活を通して、自分の特性や、やりたいこと、希望進路などが見つかる場であってほしいと思う。

○桃山高校はＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）指定校で、グローバルサイエンス部には部員が 80 名程度在籍している。生物班には魚班や鳥班などいろいろあるが、その中に鮎の研究をしているグループがある。個体の管理は難しく、気をつけないといけないことも多くあるが、長期休業中も登校して熱心に研究している姿がある。この研究が好きで、大学進学後は生物の研究者になりたいという願いを持って、そういう研究ができる大学はどこにあってどんな教授がいるかと調べている生徒もいる。この生徒たちが本当に将来研究者になるかどうかは分からないが、今これを好きでやっているということが非常に大事で、好きな分野に打ち込める高校というものも大切だと考える。

○特色化の議論においては、おそらくいくつかレベルの異なる要素があるのではないか。進学に特化したようなコース、国際教育、ＩＣＴなどが考えられているが、例えばドイツなどヨーロッパ型は、三分岐制のような形で、中等の段階で基幹学校、職業学校、進学準備学校に分かれている。専門教育と一般教育が学校種別で分かれてしまうような形である。それに対してアメリカでは、総合制高校として、１つのハイスクールの中に複数のコースがあるような形になっている。これまでの議論を踏まえると、おそらく北部では、総合制ハイスクールに近い形で、一般的なものを大事にしつつも、コースなどをお互いに行き来できるような形を考えていくという方向が考えられる。一方で、選択肢が多い地域では、断片化するのではなく、大きくカテゴリーを示していくような方向が考えられる。そうした特色、学校制度といったシステムの部分と、学校のスクールカラーや先輩の様子などといった中身の部分の両面を、しっかり区別しながら考えていく必要がある。

○制度改革の議論となると、カテゴリーをどうするかといった話にもなってくるが、最終的に行き着くのは、生徒たちが本当に行きたいと純粋に思える高校を増やすということ。魅力化というのはそういうことだと思う。だから特色化していくためには、結局魅力化していかないといけないというのが一番の本丸の考え方である。普通科とは何かと言えば、一般教育をしっかりとやる、全人的な本当の意味での教養、生き方の幅を担保するものということになるのではないか。

○今、ペアレントクラシーと言われるように、大学全入状態の層と、大学入試が非常に過熱している層とがかなり分かれてきており、しかもそれが早期に選別されつつある。中学校や小学校受験も、今後加速するのではないか。大学では一部の学部だけ受験が非常に過熱しているが、ほとんどの学部では実質的には選抜機能が働いていない。推薦入試などで年内には大学等進学が決まるということが多くなってきており、その中で結果的に、中学校・高校での経験や学びなどが空洞化している。基礎学力が本当に定着しているのか、キャリア意識が本当に育ってい

るのかをはかれない状況で本当によいのかといったことが、この間の様々な教育改革の根本にあるのだと思う。

○高校段階で本格的に選択をする生徒たちを、しっかり伸ばして社会に繋げていくのが最大の戦略ではないか。人材を確保してなんとかするというような時代ではない。授業の延長線上で資格は取れるが、実際にものになっているのか。社会を本当に担っていくのは、実際に地力をつけた、実力のある子どもたちであって、それには精神的な成熟などが重要になってくる。総合的な探究や課題研究において、１つのものを突き詰めてやっていくことや、社会に目を開かせていくことが求められる。ＳＴＥＡＭの「Ａ」の意味は、創造性もあるが、人文学のアーツの「Ａ」でもある。人文学というのは、サイエンスに対して、幅広く物事を鳥瞰的に見るものである。だから社会派の人間をどう育てていくのかということが、この間の国の基本的な基調だと思う。「エージェンシー」や、「社会に開かれた」という発想もそうである。キャリア教育の視点などによって、社会としっかりと斬り結ぶ高校での経験が必要だと考える。

◆現在、福知山公立大学が、地域の高校などと結びついて、地域人材をうまく輩出しようとするようなカリキュラムなどをつくっているように聞いた。今回の懇話会でのヒントになるような取組はあるだろうか。

□福知山公立大は小さな規模の大学であるが、全国から学生が来ている。特徴として、人口 10 万人以下の都市から来ている学生が非常に多い。その学生たちの多くは、自分の地元の町を活性化したいという思いで来ている。そういう学生たちが、多く地域に入り込んでいき、福知山市も若者が町に入ってくることを歓迎して、いろいろなところで活用しようとしている。
またタイムリーだったのが、３年前に情報学部を立ち上げたことである。コロナ禍になって、社会情勢が情報活用の時代へと移り、地域の人たちが地域に入り込んだ学生たちに情報活用も求めるようになった。学生の姿を地域の人が見ている、学生は地域の中に入り込んで地域の現状を見ているということが、好循環しているのではないか。大学１年生の段階から、非常に小さな集団でのゼミ方式で地域に入っていっていることも、大きな特色である。

□多くの生徒が通う普通科における特色化という観点で、本当に大事なのは魅力化だということを、改めて実感させていただいた。普通科について、何のために高校で学ぶのか、これからの時代における高校での学びは何なのか、どういうことが必要なのかという観点で考えていく上で、キャリア教育が１つのキーワードになる。目先の特色、差別化ということよりも、しっかりとこれからの普通科教育の在り方を考えるよう、御示唆をいただいた。

◆ここからは、職業学科・総合学科等についても御意見をいただきたい。

○実際の社会に出ると、イノベーションなどと言って、いろいろな価値創造を求められるため、「普通」とは何なのだろうかということを考えさせられる。マイノリティとマジョリティとで言うと、圧倒的なマジョリティが普通科である。それ以外の職業教育系の学校・学科は、学力的に少し低く印象づけられている構造があるのではないか。しかし、実際の学校現場ではそう

ではなく、非常に生き生きと学んでいる生徒がたくさんいる。
例えば農業高校で言うと、日本の食料安全保障を見据えたときに、農業は今後成長産業になっていくものであり、重要なセグメントを占めていく。今現地の農業者たちを見ていると、新規就農がかなり増えている。大学を卒業して新規就農する人たちも増えており、新しい生き方や働き方のトレンドとなっている。農業を価値創造の最前線として見ている若い人たちは、実は決して少なくないと思う。ただ一方で、農業高校のカリキュラムの中では、なかなかそういった要素などを反映しにくい現状がある。職業学科において、価値創造をどう展開していくか。
価値創造は、何か新しいものをゼロからつくるというよりも、掛け算である。例えば、テクノロジーと農業の掛け算の中で、新しい働き方や効率化といったものを学び、実現し、高付加価値型の作物を育てるなど、これまで経験と勘に頼っていたものを、科学的にアプローチするということを若い人たちが取り入れ始めていて、農業で稼いでいる。そのような成功した姿と、様々な職業学科の領域で面白いイノベーションが起こっていることとを教育が接続させていくと、非常に大きな魅力が見えてくるのではないか。
とりあえず大学に入って、何となく農業ということもありえるが、農業高校はイノベーションや価値創造の最前線にある、そういう資源と繋がりながら教育をやっているということが、非常に大事である。また、その現場で教員を支える仕組みの必要性も痛切に感じる。社会状況は変わっており、社会的な資源とのネットワークがなかったり、マッチングもできなかったりするので、それを繋いでいく教育コーディネーターのような存在が、非常に重要である。

○高校生が学校で生き生きと学んでいる、そしてオリジナリティを持って教育にあたるという部分を、魅力化というキーワードでもう少し磨いていくことができるのではないか。大学全入時代になっていく中では、これまでとは違うキャリアパスのようなものが、職業学科では特にでつくれるとよい。職業学科出身の生徒が、就職をしたり、自分で起業したりする中で、例えば10年後に本気で経営を勉強したくなったというときに、入りやすい大学などがあると、社会はさらに大きく変わっていくのではないか。

○農業は今本当にイノベーションが起きている。もっと「儲かる農業」を子どもたちに見せていかないと、農業に携わっていかない。全国的に、農業高校を卒業して農業関係に就職する生徒は少ない。ただ、将来パティシエになりたいから、食の基本を学ぶために農業科を選択したという、明確な目的意識を持って入学している生徒もいる。

○地域との連携について、綾部高校の農業科では地元の酒造メーカーと福知山公立大学との３者で連携した取組をしている。酒米を高校生が作り、酒造メーカーがお酒を造って、そのラベルを大学生が作るというものである。このような地域連携の取組が行いやすいのが、職業学科である。

○農業は本当に将来性のある分野だと思う。オランダは、耕地は日本の４割程度だが、農産物の出荷高が世界でもトップクラスである。ロボティクスの技術やＩＴなど、機械化・自動化を進めており、工業化というような大規模な農業のイメージである。政府がスマート農業を提唱している。高校もそういう視点を持って変わっていくことが求められる。

○特色は魅力であるという考え方に賛同する。その魅力を出していくためには、高校教員の力だけではなく、地元の企業や大学など、地域人材の積極的な活用を普通科でも図っていくことが必要なのではないか。そういった外部講師をどう生かしていくのかという面においても、教員の指導・支援の能力を高めていくことは重要である。看板はいくつも掲いるが、教育課程や学習内容があまり変わらないということでは特色にならないので、学校によって異なる教育課程や学習内容を、しっかりとした形で指導・支援できる高校の教員の質が、魅力ある高校の大きなポイントの１つだと考える。

○高校のコースが漠然としている、細分化しているといった見方もあるかもしれないが、送り出す中学校の方が、中学３年生段階に向けてキャリア教育で意識を高めさせていく視点が重要なのではないか。中学２年生で職場体験等を行っているところもあり、どのように進路選択に繋げていくのかという、中学校側のキャリア教育の充実も必要である。

◆中学生がなんとなく持っている、職業学科イコール職業訓練校のようなイメージの払拭は、必要なことである。

○昨年のビジョンの検討会議では、北桑田高校の視察を行った。北桑田高校は、林業の分野の京都フォレスト科と普通科を併設している。やりがいを感じながら活動している職業学科の生徒の姿を見ることができた。また、併設のメリットを活かして、普通科の生徒が職業学科の生徒とともに林業関係の実習を学ぶ場があることも知った。部活動での全国募集を行っている学校でもあり、寮生活をしている生徒がいる。地理的な制約によって塾に通えなくても、大学進学等の準備ができるよう、オンラインで予備校の講義を受けられる仕組みもあり、職業学科も含め、大学進学できることを強みの１つにしている。また、地域の方々と学校のビジョンを共有し、地域からの応援・支援も受けている。学校は施設を地域に開放するなどして、ウィンウィンの関係を築いている。広報にも力を入れた結果、他府県など広い地域から志願者が集まり、寮の収容を心配する状況があるそうだ。学校施設の更新も魅力化に繋がる要素の１つではあると思う。全国大会を目指している部活動もあれば、自由に楽しめるフリースポーツクラブもあるなど、様々な可能性を感じられる学校であった。普通科の学びと専門学科の学びに柔軟さを持たせるという視点に繋がるのではないかと考える。

◆次回は、引き続き職業学科・専門学科について、また、地域の実情を踏まえた府立高校の魅力化について、議論を深めたい。